

文学博士前田専学君の「シャンカラ著『ウパデーシャ・サーハスリー』の本文校訂と註解」に対する授賞審査要旨

前田専学君の『ウパデーシャ・サーハスリー』の本文校訂と註解の作業は、次の一連の三部作を以て完結した。

A Sankara's Upadesasahsri. Critically edited with introduction and indices by Sengaku Mayeda. Tokyo: The Hokuseido Press, 1973. (以下A本と略称する。)

B A Thousand Teachings: The Upadesasahsri of Sankara. Translated with introduction and notes by Sengaku Mayeda. University of Tokyo Press, 1979. (以下B本と略称する。)

C 『ウパデーシャ・サーハスリー——真実の自己の探求』シャンカラ著・前田専学訳（岩波書店、一九八八年四月）（以下C本と略称する。)

シャンカラは、しばしばインド哲学史上、最大の哲学者と見なされるが、かれの著作として伝えられる著書は数多く、三〇〇部以上に達し、精確に研究するには種々の困難をとまなう。

従来は、かれの著『ブラフマ・スートラ註解書』を基準として他の著書を参照しながら研究を進めるのが、内外の学者の通例であったが、前田君は『ウパデーシャ・サーハスリー』を基準として研究すべきであると主張する。その理由は次のごとくである。

(1) この書がシャンカラの真作であるということは、すべての学者に認められ、疑いの余地が無い。

(2) 『ブラフマ・スートラ註解書』そのほかシャンカラの大部の諸著書は、ときには相互に矛盾した説明が伝えられているので、どれがかれ自身の意見であるのか判定に苦しむ場合がある。ところがこの書はかれ自身の独立の著書であるから、そこには矛盾した所説が見られない。

(3) 論議が哲学的な問題に集中している。

しかしこの書については、従前には信頼し得る刊本が無かったので、前田君は、研究の第一着手として、可能な限り諸国に保存されている写本総計四二と刊本一四種を参照検討して、標準テキストを作成し、英文で出版した。これがA本である。この校訂本の作成成果は、インド哲学の原典校訂出版の範たるものであるとして、内外の学界から、高い評価を受けている。

つづいて詳しい研究を含む序論および註解を付せられた英訳を刊行した。これがB本である。

前田君はその後シャンカラの多数の書を研究し幾多の論文を公表したが、その成果を踏まえて、いわば研究の完結として、邦訳(C本)を刊行した。文献学的な研究はいちおうA本、B本で終わっているが、C本では思想的理解の結果をはっきりと示している。

C本の註解は、単に読者に解らせるための註記ではなくて、著者の諸般の研究からの要約であるという性格をもっている。A本、B本では、術語の意味内容を英語で適切に表現し難い場合には、原語をそのまま(訳さないで)用いるか、或いは語源に由来する慣用的な訳語例に従っていた。この書の原典には、内外のいかなるサンスクリット大辞

典にも収録されていない特殊な術語、あるいは説明の無い語を時々用いているために、A本、B本ではそうせざるを得なかったのである。

ところがC本では、日本語に訳出することになると、改めて吟味が必要とされた。そこで術語の概念規定を明確ならしめて、新しい訳語を考え出し、また新しい解釈を述べることができた。

先ずこの書の題名を、B本では、従前の諸訳 (Swami Jagadānanda の英訳など) に従ってそのまま、A 'Thousand Teachings' としたが、その後さらに考究を進めて、むしろ「千の (あるいはたぐさんの) 詩節からなる教説」という意味に解すべきであると論証している。(C本、三、二八五ページ)

シャンカラは宇宙開展の質料因を (未開展の名称・形態) という術語で表示しているが、この用法はシャンカラに特有であり、かれの直弟子たちの間にすら見られないということを明らかにした。(C本、二〇七、二七二ページ) これは、前田君がシャンカラ周辺の哲人の著書をひろく通読しているから、このように断定し得たのである。

シャンカラは絶対的な一元論の立場をとっていたから、宇宙開展の質料因の位置づけについて一つの難点をもってゐる。もしもその質料因が「有」であるとすると、絶対者ブラフマンの外にあることになり、二元論に陥り、絶対的な一元論の立場を抛棄することになる。またもしも「無」であるとすると、絶対静止のブラフマンからいかにして現象世界が現れ出たかという所以を説明し得ないことになる。シャンカラは、その質料因は「それ (≡ブラフマン) であるとも、それとは異なった別のものであるとも表現することができない」ものであるとして、この難点を切り抜けるようにしたこと、そうしてこの見解がシャンカラに特有であることを明らかにした。(C本、二〇八ページ以下、二

七二ページ以下)

シャンカラの宇宙開展論が、仮現説であるか、開展説であるかということは、インド哲学史上、大いに論議されているところであるが、かれの宇宙論は、いわゆる仮現説ではなく、開展説でもなく、開展説から仮現説へ移行行く過渡的段階にある、いわば初期仮現説とでもいふべきものであると考えられる可能性のあることを、『ウパデーシャ・サーハスリー』について立証した。(C本、二〇九、二七二、二七三ページ)

各個人存在の奥に存する本来の自己(アートマン)が実は絶対者であるということとを教える文句として、ウパニシヤッドのうちの「君はそれである」という文句がしばしば典拠とされるが、その趣意を理解するためには、二つの語の「一致と矛盾の方法」なるものが適用されねばならぬということを詳細に解明している。(C本、一七〇—一七六ページ、二六九ページ以下)

個人存在の自覚はアートマンの影像であるという思想をシャンカラがいだいていたことを明らかにした。(C本、一五二—一五七ページ) そうしてこの思想はサーンキヤ説と仏教の唯識説の影響のもとに考えられたシャンカラ独自の思想であろうと考えている。(C本、二六九ページ)

前田君は、シャンカラ哲学の中心概念を正確に表現し伝達することに細心の注意を払っている。例えば、アートマンの本性である *caitanya* は、従来学界では「靈智」「知性」などと訳されていたが、これを「純粹精神」と訳している。(C本、二七五ページ) また *paramārthavasthā* は、「最勝義」などと訳されていたが、これを「最高の真理の立場」と訳出している。(C本、二七四ページ)

認識論に関しても独自の解明を試みた。外界の対象を知覚する場合には、統覚機能が感覚器官を通じて、対象に向かつて外に出て、統覚機能が外界の対象の形相をとる、という思想を明確にした。(C本、五七ページ以下、二六五ページ、第一四章註1)　　こういう思想が後代の不二一元論に存在したことは、従来学界でも知られていたが、これをシャンカラについて明らかにしたのは、前田君の功績である。統覚機能が対象を知覚する過程については、詳細に論述している。(C本、二七六―二八〇ページ)

インド哲学一般では、意 (manas) と統覚機能 (buddhi) とは同義語であるが、シャンカラのこの書においては、別のものとして考えられているという問題を投げかけている。(C本、五一、二六五ページ)

シャンカラがこの書において説く念想として *prasahkhyāna* (I, 18, 9; I, 18, 12; I, 18, 17) および *parisamkhyāna* (II, 3, 112) がある。これは、インダ哲学史上、ほかには出て来ない術語であり、簡単に邦訳することは困難であるが、この訳述によってほぼ概略を理解し得るに至った。(C本、二二八ページ以下、二五七ページ以下、二八一ページ)　　前田君の研究は、ヒンドゥー教の解明のためにも重要である。

ヒンドゥー教の中心概念である *bhakti* は従来学界では「誠信」または「信愛」と訳されていたが、シャンカラの場合には、そうではなくて、「[それに]専念する」という意味であることを明らかにした。(C本、二六六ページ註8)　　ヒンドゥー教徒は、生涯のあいだに、生誕式、入門式、結婚式、葬儀などを行うべきであり、それらの儀式をすべて *samskāra* と呼び、学界ではその語源的意義に従って「浄化式」と呼んでいた。前田君もB本(二二五ページ)では学界の通例に従って「purifying ceremonies」と訳していたが、最後のC本では、その本質をはっきり明示して

「通過儀礼」と訳解している。(二〇六ページ、二七二ページ註13) その試みは、単なる語学的解釈を出て、習俗の実態に迫るものである。

そのほか内外のサンスクリット辞典に適訳が見出されない諸術語に関しても、理解への道を開いている。

シャンカラ哲学の階級性ということが問題となっているが、前田君はこの書の検討により、シャンカラはバラモンのみが出家遊行者となり得る、という立場をとり、バラモン以外の入門を拒否している事実を明らかにした。(C本、一九七ページ、二七一ページ) これは『ブラフマ・スートラ註解書』には明示されていないことであり、なおさら重要である。

前田君は、『ウパデーシャ・サーハスリー』のみならず、ウパニシャッドを始めとする諸原典にわたって基礎的準備的な研究を十分に積み上げているために、最後に刊行されたC本は、叙述が明晰で、理解し易いものとなっている。さらにA本、B本では行わなかったことであるが、C本(二八五―三〇一ページ)では、インド思想史全体の中の『ウパデーシャ・サーハスリー』の位置づけを行っている。

以上により前田君は、シャンカラの哲学思想の研究を今後推進するために、確実な基礎を提供したことになり、ひいてはインド哲学史全体を学問的に研究するために大きな貢献をしたことになる。